

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K00217

研究課題名（和文）「ナル表現」の認知言語学的研究 - 類型論を視野に入れて -

研究課題名（英文）A Cross-Linguistic Study of "Naru-expression" from the Viewpoint of Typology

研究代表者

守屋 三千代 (Moriya, Michiyo)

創価大学・文学部・教授

研究者番号：30230163

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本で初の「ナル的表現」研究の通言語的な観点に立つ研究であり、認知言語学や哲学を視野に入れた点で極めてユニークである。そして、その成果を書籍の形にまとめて、世に問うことができるようになった点も評価できると考える。研究成果として最も注目すべき点は、世界には「出来」と「変化」の意味を専用に表す「ナル相当動詞」を持つ「ナル的言語」が数多く見られ、その多くが(S)OV言語であり、主観的把握の傾向を有し、主格/ゼロ格を伴って「出来」の用法を有し、「変化」の意味を派生的に表すが、日本語の「ナル表現」は基本的に到達点の格助詞「ニ」を伴い、「変化」の用法に傾斜しており、大きな相違を示す点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ナル表現」は一般に到達点を表す「二格」を伴い「変化」の用法を表し、日本語の特徴を示すと考えられている。だが、調査の結果、実際には「出来」「変化」を専用に表す「ナル相当動詞」は世界の言語に見られ、しかもその多くが日本語と異なり、主格/ゼロ格を伴って、「出来」の用法を有するとともに、「変化」の意味を派生的に表すことが明らかになった。ここにおいて、単に「ナル・ナル的表現」の意味用法を分析するにとどまらず、「出来・変化」という概念の問題、および「ナル的言語」の多くが(S)OV言語であり、主観的把握の傾向を有することから、「ナル・ナル的表現」に基づく類型論的研究の可否という言語研究上の要点を示した。

研究成果の概要（英文）：This research is the first study in Japan to take the Cross-Linguistics Study of "naru-expressions", and is extremely unique in that it takes Cognitive Linguistics and Philosophy into consideration. The fact that the results have been compiled in the form of a book and it will be available to the public is also notable. The most noteworthy point of the research results is that there are many "naru-like languages" in the world with "naru-equivalent verbs" that exclusively express the meanings of "occurrence" and "change," although many of them are (S)OV languages, whose native speakers have tendency toward subjective construal, have the usage of "occurrence" with genitive/zero case, and express the meaning of "change" in a derivative manner, while Japanese "naru-expression" is basically accompanied by the case particle "ni" for expressing goal, and is inclined to the usage of "change", which is a point that shows a significant difference.

研究分野：認知言語学

キーワード：ナル的表現 通言語的研究 類型論的研究 認知言語学 哲学 スル的表現 SOV型言語 事態把握

## 1. 研究開始当初の背景

### (1). 日本語の「ナル表現」から出発する

一般に、日本語の「ナル表現」は、新しい事物や事態の出来や新たな局面への移行を、自動詞や受身形などによって言語化される。自動詞の場合は対応する他動詞が暗示されて、動作主などの動因を含意することがあり (ex. 「ドアが開く」は対応する他動詞「開ける」の行為者の存在を示唆し得る) また受身の場合も動作主をはじめとする動因の存在を暗示し得る (ex. 「ドアが開けられた」では明らかに行為者などの動因の存在が前提となる)。これに対して、動詞「ナル」による「ナル表現」は動因の存在を含意することがない。例えば、「春にナッタ」には「春が来た」のように「春」という存在物の移動という志向性が表現されず、帰結だけが言語化される。この点で、動詞「ナル」を伴う「ナル表現」は、自然発生的な事態を捉える典型的な「ナル表現」だと捉えられる。さらに、日本語では明らかに人の意志や能力を動因とする行為であっても、事態の出来・変化という全容を捉える傾向もあり、自然発生的な事態として「ナル表現」で表すことを好む例が見られる (ex. 「結婚することにナリマシタ」)。このことから、日本語話者には動作主体や動因の存在の言語化を回避する志向性があると考えられる。これに対し、英語等の西欧語では人の行為はもとより、一般に事態は動因が他者に働きかけて事態の発生をもたらすという意味構造を有し、意志的な存在を動因として他者を生み、あるいは動かすといった、他動詞文や使役文を典型とする「スル表現」が好まれる傾向にあつて (ex. What made you think so? 何があなたにそう考えさせるの?)、日本語のように事態を自然発生的に捉える志向性を持つ「ナル表現」は基本的に志向しないことが考えられる。

こうした背景から、「ナル表現」は日本語の特徴を示す指標の1つと捉えられてきており、それに伴い、日本語研究ではいわば「聖域」として見なされてきたようである。これに連動するように、日本における言語研究では、「ナル表現」を典型とする「自動性」の研究も、他動性の研究に比してほとんど進められてきていない。その原因として、英語を中心とした言語研究が主流となったことが考えられるが、「ナル」が「スル」のような機能動詞としての働きはもとより、補助動詞や接辞としての機能を欠く、極めて語義的な動詞であり、そのため文法研究の対象となり得なかったこともその1つであろう。「ナル」は「出来」を表す典型的な動詞だと言えるが、尾上 (1998) のように文法論的な「出来文」の範疇には収められず、「ラレル文」との共通点もほとんど着目されていない (守屋 2012)。また何よりも「ナル表現」の典型は「変化・推移」であると捉えられてきたことも、「ナル表現」を「出来」と言う枠で捉え難くしてきたと考えられる。しかし、「ナル表現」にも「出来」の用法は見られ、しかも「変化」が「出来」の連続、あるいは時間幅をもった「出来」と考えることが可能であるとしたら、これは明らかに「出来」の範疇に入る。また、事物の「出来」や「変化」の表現は、人の発話の多くの部分を占めるはずであり、その背後にある「出来」や「変化」および「存在」などの概念は、言語研究のみならず哲学の前提をなすものである。このように考えると、「出来・変化」を表す「ナル表現」は日本語の特徴という観点をはるかに超えた研究課題となり得ると考えられる。

### (2). 日本語以外の「ナル的表現」に目を向ける

本研究を開始する前に、英語や中国語では日本語のような「ナル表現」が見られないことを確認し、同時にごく簡単にはあるが、朝鮮語 (朝)、トルコ語 (土) では「ナル相当動詞」があることと、日本語の様々な「ナル表現」がこれらアルタイ系の言語では、「ナル相当動詞」を用いて表す現象を観察した (池上・守屋 2010、守屋 2010・守屋 2016)。その結果、日本語を加えた3か国語では共通して「ナル・ナル相当動詞」を用いた「ナル表現」が観察されること、さらに朝・土ともに逐語的に和訳すれば確かに「ナル表現」となるが、日本語で言う「ナル表現」は「(Aが)Bにナル」のような、到達点の格表示を伴う「変化」の表現が中心であるのに対し、朝鮮語やトルコ語では、(Aが)Bがナル」のように、主格やゼロ格を伴う「出来」の形式で表現されるのを主とし、日本語で「変化」にあたる意味を派生するという根本的な相違があることが明らかになった。これは日本語の「ナル表現」が世界の「ナル的表現」全体から見ると、異質であることを示唆するとともに、「ナル表現」を「出来」の観点から捉え直す必要性も見えてきた。ここにおいて、通言語的に「ナル的表現」の実際を調査・分析する研究の必要性を痛感した。

## 2. 研究の目的

### (1). 研究開始当初の目的

研究開始に際して、以下のような目的を掲げた。

・通言語的観点による記述的研究：日本語の「ナル」の意味・用法、およびそれを伴う「ナル表現」を軸として、対照的な観点からユーラシアの言語における「ナル相当動詞」の意味・用法、および「ナル的表現」の実際を、研究協力者とともに記述・分析する。

各々の言語話者の事態把握に見られる傾向の考察：「ナル的言語」には主観的把握の傾向が見られるかを明らかにする。

「スル的言語」であるフランス語原文の『星の王子さま』の原文と各国語訳および日本語訳とを対照し、「ナル的表現」の現れ方を調べる。以上をふまえ、ユーラシアの「ナル・ナル的表現」の実像に迫る。

「ナル・ナル的表現」を旧約聖書の創世期冒頭に見られる (日本語「光あれ」の箇所)「出来」の表現に着目して各国語の「ナル的表現」の現れ方を調査する。

哲学における「出来」の概念と「ナル相当動詞」との相関を考察する。

## (2). 研究日程の延長に伴う目的

コロナウィルス蔓延に伴い、本研究は対面による研究会の開催が難しくなっていたが、研究日程が2020年度から2022年度まで延長が可能となり、これに応じて、本研究では書籍『「ナル的表現」をめぐる通言語的研究 認知言語学と哲学を視野に入れて』の刊行を、新たに目的の1つに掲げるに至った。すなわち、本研究の後半は上記(1). の考察を進めながら、研究協力者の研究成果を検討し、書籍の形で具体化することを目的に加えた。

## 3. 研究の方法

### (1). 通言語的観点による記述的研究

上記2(1)①②の通言語的研究の目的に基づいて、日本語の「ナル」の意味・用法、および「ナル表現」の特徴をふまえた4項目から成る調査項目を作成し、研究協力者とともに全28言語について調査を行った。質問項目は1. 「ナル相当動詞」と存在動詞(全5項目: 「ナル相当動詞」の有無、「変化」の表し方等を問う) 2. 「ナル的表現」の実際(全25項目: 日本語の「ナル表現」の意味・用法について「出来・出現・推移・変化・義務的表現・許可/禁止の用法・推移の願望・コピュラの用法の有無等」を問う) 3. 事態把握(全5項目: 主観的把握の傾向の有無・度合いを問う) 4. 事態把握の実際(全15項目: 主観的把握の傾向・スル表現の志向性の有無等を問う)であり、ほぼ50項目に及ぶ。基本的に日本語母語話者が各言語の母語話者に対しおよび質問への回答を確認しながら調査を進めた。このように日本語母語話者を軸とした調査としたのは、インフォーマントが基本となる日本語文の意味を誤解する可能性があるのを恐れたためである。当初は数言語に過ぎなかったが、結果的に28言語を数えるに至った。これらの結果は研究会で発表するとともに、一部の考察を認知言語学会でワークショップを開き発表した。さらに、の『星の王子さま』の原文および各国語訳の「ナル的表現」と和訳の「ナル表現」を対照して、これらがどのような違いを生じるか対照し、その結果を研究会で発表した。

### (2). 「ナル・ナル的表現」における「出来」「変化」の「ナル的表現」と概念の研究

上記2(1)の「出来・変化」の「ナル的表現」をめぐり、旧約聖書の創世記の「光あれ」の箇所を中心に各言語でどのように「ナル・ナル相当動詞」が現れるかを考察した。研究会での結果の発表、さらに、哲学の研究者による「出来」の概念と言語の関連の発表を通じて、諸言語における「ナル(的)表現」が「出来」に基づく表現であることを考察し、確認した。研究成果を認知言語学会でワークショップを開き、発表した。

### (3). 書籍刊行に向けた研究

上記2(2)の目的のもとで各担当者が研究を進め、研究論文を執筆し、研究会で検討した。

## 4. 研究成果

### (1). 最終的な研究成果

研究の最終的成果は、本研究の後半の目的である書籍『「ナル的表現」の通言語的研究 認知言語学と哲学を視野に入れて -』の刊行に向けた、論文の形で表すことができた。その概要は、次に示す本書籍の目次の ~、および(2)である。

#### 通言語的研究に基づく研究論文

本書第1章-1: 調査項目の分析: 日朝蒙(モンゴル語)土シ(シンハラ語), 第1章-2: 「ナル的表現」とは何か 出来・存在・変化の観点から考え : 日蒙土ク(クルド語)シ, 第1章-3: 『星の王子さま』から見えること: 日朝蒙土シ仏(フランス語)他(スイスドイツ語) 第2章: 世界の「ナル的表現」: 各国語の「ナル的表現」の特徴に関する研究論文: 日朝蒙竹(ヤクート)土中(中国語)ゾ(ゾゾ語)越(ベトナム語)サ(サンスクリット)波(ペルシア語)クシハブ(ヘブライ語)亜(アラビア語)露(ロシア語)ポ(ポーランド語)独(ドイツ語)仏、その他(チェコ語、リトアニア語、ルーマニア語、ポルトガル語(ブラジル)、ハンガリー語、バスク語、英語)

#### 言語研究の観点に基づく、今後の研究の方向性を示す研究論文

本書第3章: 『「ナル的表現」と事態把握、言語類型論から見た「ナル的表現」』、「翻訳小説の文末のOL-/BO-L-の数量的比較 トルコ語、アゼルバイジャン語、ウズベク語訳の『星の王子さま』」, 「ナル的授与動詞構文と『ナル(相当)動詞』構文」, 「『ナル的表現』のスキーマをめぐって 出来文、中動態との関連から」, 「『古事記』と『古事記傳』から見た『ナル』の意味」

#### 哲学の観点からの研究論文

本書第4章: 『「ナル的表現」の哲学的考察: 創世記1章第1節-2章3節と出エジプト記3章における動詞 h-y-h, 「『ある』の哲学、そして『なる』の神学 永遠と時間のはざままで何が語られうるのか」, 「アラビア哲学における存在と生成」, 「サンスクリット古典文法学に規定される動詞複合語 『状態の変化』を動詞形に表現する事例のひとつとして」

### (2). (1)を通じて明らかにできたこと

通言語的観点による記述的研究より、日本語の「ナル」の意味・用法、およびそれを伴う「ナル表現」を軸とした調査項目に基づいた調査結果から、ユーラシアにはアルタイ系言語と呼ばれる言語を中心に、多くのSOV型言語において「ナル相当動詞」が観察されることがわかった。

日本語の「ナル表現」と異なり、他言語の「ナル的表現」は、基本的に帰結を中心とした「変化」よりも「出来」を意味的、言語形式的に表すことが明らかとなった。

これらの「ナル的言語」では、緩やかな主観的把握の傾向が見られることが確認できた。た

だし、このことは「スルの表現」も同時に好むことを妨げない。

・「ナル・ナル的表現」を「出来」の観点に着目し、哲学における概念との相関を考察した結果、確かに「ナル的言語」の多くは新事物の「出来」の場面では「出来」の用法の「ナル的表現」が現れることが明らかとなったが、日本語や朝鮮語、および中国語では、「出来」の表現に「ナル・ナル相当動詞」を用いず、存在動詞を用いることが明らかとなった。このことは、「出来」「出現」「存在」の概念の相違をさらに考察する必要性を示す。

・「出来・変化」を専用に表す厳密な意味での「ナル相当動詞」を持たない、「スルの言語」であるドイツ語、英語でも、例えばドイツ語の“werden”は「出来・変化」を表す用法を持ち、英語では様々な動詞で語義的に「出来・変化」を表すだけでなく、“be”単独で変化の意味を内包しているなど、日本語のように「変化の表現」にやや傾斜している点が見える点が観察される。

### (3). 今後の課題と研究の方向性

・本研究は「ナル的表現」の研究として、先駆的なものであるとともに、未だ先鞭をつけたに過ぎない段階にあると言えよう。今後は協力者とともに、調査項目を見直すとともに、調査対象の言語数およびインフォーマントを増やして、調査全体の精度を高める必要がある。

・今回の研究で見えてきたように、「ナル的表現」から見た類型論的な研究という方向性・可能性を模索していく必要があると考える。

・その後の成果報告で、タミル語に日本語の「ナル・ナル表現」との共通性が見られることがわかってきた。ここにおいて、日本語に至る圏論的研究もあわせて視野に入れていく必要がある。これに関連して、古代日本語の「ナル表現」を改めて問い直す必要がある。

・「ナル的表現」が実現する動的事態における自動性に関する研究は、自動性・自発性とは何か、それが「出来・存在・変化」という言語と概念といかに関わるか、という極めて広範かつ根本的な研究分野が見えてくる。

・「ナル的表現」および自動性の研究は、「スルの言語」との相関性という問題とともに考える必要がある。筆者は、両者は対立する概念ではなく、表裏の関係にあると考える。両者をつなぐものは、自発的な「出来」を実現させる「能力」あるいは「生命力」とでも呼ぶべきものであり、両者は一方の視点から捉えるとその力によって、自発的に事態が「出来」し、他の視点から捉えるとその力が他動的かつ再帰的に「出来」をもたらす、という関係にあると考える。例えば、「発芽」や「開花」はそれぞれの植物に内在する「力」が「芽」「花」という形をもって外界に現れると捉えられると同時に、そうした力が「芽」「花」を発生させると捉えることもできる。実際、日本語ではその様子を言語化すると「芽が出た」とも「芽を出した」とも、また「花が咲いた」とも「花を咲かせた」とも言えるであろう。一見、アニミズムの発想と映るかもしれないが、アニミズムのように人智を超えた事物の存在を前提とするのではなく、むしろその事態の中心は中空であり、外界に発生するのは「芽」であり「花」である点で共通する。その意味で両者は表裏の関係にあると考える。この点ももちろん、今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 31
2. 論文標題 「ナル表現」研究の現在と課題 通言語学的に考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語日本文学	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 19
2. 論文標題 「ナル表現」とは何か 出来・存在・変化の観点から考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 571
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 19
2. 論文標題 日本語の「ナル表現」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 593-598
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 18
2. 論文標題 「ナル表現」をめぐる通言語学的研究 日本とユーラシアの「ナル表現」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 598 598
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 18
2. 論文標題 ユーラシアの「ナル表現」から日本語の「ナル表現」を再考する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 598 602
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 5
2. 論文標題 「ナル表現」研究の新たな試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文化研究 (上)	6. 最初と最後の頁 59 66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 5
2. 論文標題 認知言語学から見た日本語	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文化研究 (下)	6. 最初と最後の頁 1 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 28
2. 論文標題 事態の主観的把握と「ナル表現」 認知類型論の観点より	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語日本文学	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 守屋三千代	4. 巻 16
2. 論文標題 日本語話者が見た「ナル」表現	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 587-592
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 「ナル表現研究会」と現在の課題
3. 学会等名 ナル表現研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 ナル表現研究における認知言語学の観点の必要性
3. 学会等名 ナル表現研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 ナル表現研究の今後の展開
3. 学会等名 ナル表現研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 ナル表現から哲学への飛躍
3. 学会等名 ナル表現研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 守屋三千代・山本美紀
2. 発表標題 日本古典文学から見る「ナル表現」
3. 学会等名 日本認知言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 中日の「笑い」をめぐる対照研究
3. 学会等名 漢日対比言語学検討会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 「ナル表現」研究の現在
3. 学会等名 漢日対比言語学検討会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 日本語の「ナル表現」とハイコンテキスト
3. 学会等名 漢日対比語言学検討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 「ナル表現」とは何か 出来・存在・変化の観点から考える
3. 学会等名 日本認知言語学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 日本語の「ナル表現」
3. 学会等名 日本認知言語学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 ナル表現研究の新たな試み
3. 学会等名 第5回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 認知言語学から見た日本語
3. 学会等名 第5回中・日・韓・朝言語文化比較研究国際シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 ユーラシアの「ナル表現」から日本語の「ナル表現」を再考する
3. 学会等名 第18回日本認知言語学会全国大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 旧約聖書に見られる 出来・存在・変化の表現:日本語
3. 学会等名 第2回ナル表現研究会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 日本語の授受表現における「恩恵」の意味
3. 学会等名 漢日対比言語学検討会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 日本語の「ナル表現」と各言語の翻訳
3. 学会等名 第1回類型論を視野に入れた「ナル表現」研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 古典文学に現れた「ナル表現」
3. 学会等名 第1回類型論を視野に入れた「ナル表現」研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 守屋三千代
2. 発表標題 「ナル表現」をめぐる「日本人論」
3. 学会等名 第1回類型論を視野に入れた「ナル表現」研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	池上 嘉彦  (Ikegami Yoshihiko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	角道 正佳  (Kakudo Masayoshi)		
研究協力者	栗林 裕  (Kuribayashi Yuu)		
研究協力者	岡 智之  (Oka Tomoyuki)		
研究協力者	宮岸 哲也  (Miyagishi Tetsuya)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 漢日対比語学検討会	開催年 2019年～2019年
---------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------